

# これまでの授業を「多様性」という視点でとらえ直してみる

東京都国分寺市立  
第二中学校教員  
笥 敏子  
(かけひ としこ)

## 1 はじめに

本稿を書くにあたり、特集テーマである「多様性」を、私自身はどのように考えて家庭科の授業をしてきたのだろうか悩んだ。「多様性」といっても、その内容は広く、深い。自身の力量不足もあり、「家庭科の授業においては、これとこれです。」というものを持ち合わせていない。そこで、私の中のおぼろげな「多様性」のイメージと共に、教科書（開隆堂、家庭 703）の目次を改めて見てみた。

すると、「多様」という文言が入っている項目があった。「多様な人びとが暮らす地域（p58）」、「多様な人びとと共に生きる（p280）」というのを見つけた。しかし、それ以外にも、私の中の「多様性」のイメージと合うものが、たくさんあった。表紙をめくるとすぐに、5枚の写真（下図）がある。そこからは、世代（高齢者や幼児）、人種や民族、ジェンダー、障がいの有無、家族の形などに関する多様性が読み取れる。これらの視点をもとに、これまでの授業の一部を、とらえ直しながら事例紹介をしてみたい。



教科書掲載の5枚の写真

## 2 実践事例

### 事例1：地域に暮らす高齢者（中学3年生）

高齢者の学習のひとつとして、認知症サポーター養成講座を行っている。地域包括センターと連携し、認知症サポーターキャラバンの方に来校していただいた。

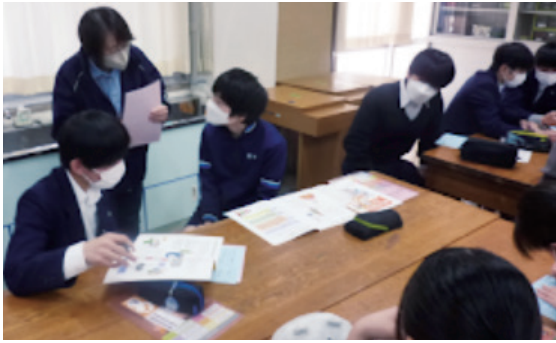
認知症についての理解を深めるとともに、地域に暮らす高齢者とのかかわりについてリアルに学んだ。キャラバンのメンバーに高齢の市民も参加していたので、生徒は様々な高齢者がいることにも気づいた。地域には、多様な高齢者がいて、世代によっても多様な暮らし方やかかわり方があることを知るきっかけになり、「多様性」を理解することにつながっていくと考えられる。



養成講座写真①：寸劇のひとつ

#### 認知症サポーター養成講座の生徒の感想より

- ・ 認知症にもステップがあり、行動一つ一つにもいろいろ原因があって、家族の対応の仕方によっても、症状が加速してしまうことを知れた。
- ・ 認知症の方に寄り添って、支え合って、対等な関係を築いていくことで、認知症の方の不安をかき消せて、安心して生活してもらえるのかなと思いました。
- ・ 祖母が近くに居るんですけど、もっと外に連れてったりして、予防したいです。
- ・ 「明日の記憶」という本を読んだことがあるが、認知症の人の気持ちを考えること、本人の感じる不安や罪悪感というものを今日の授業でも、その本でも感じた。本人がどう考えているのかをしっかりと理解して対応したいと思った。



養成講座写真②：個別の質問にも丁寧に答えるスタッフ

## 事例 2：誰もが住みやすい環境（中学 2 年生）

住生活の学習の終わりの方で、安全対策や災害への備えについてのレポートに取り組んだ。それには、安全対策が必要な幼児・高齢者・障がいのある人の特徴を理解する必要がある。一つの手段として、視覚障がい疑似体験用のゴーグルを使ったり、白杖体験を取り入れたりした。白杖体験は、地域の NPO 法人の方に動画を作成していただいた。

動画視聴後、白杖体験を行った。視覚障がいと言っても、同じように見えにくい（または見えない）のではなく、様々な状況があることに生徒たちは、気づいていた。疑似体験ではあるが、自分の感覚や声のかけ方などから、相手の人に合わせた対応をすることを学んでいた。これも、「多様性」を理解し尊重することにつながっていくのだと感じた。

### 白杖体験の生徒の感想より

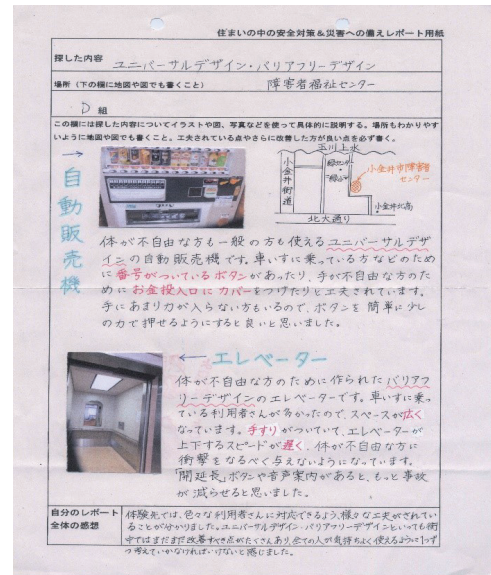
- ・今回は知っている場所を歩きましたが、知らない道だったら、もっと難しいと思います。ガイドヘルプもどうやったら歩きやすいかなど、すごい気を使いました。安心して歩けるように心がけました。
- ・白く濁っているだけでも、かなり見えにくいことが分かりました。動画を見て、白杖を使っている人のこともよくわかりました。
- ・見えない体験より、ガイドヘルプの方が難しかった。今まで、目の見えない人を見かけても、驚かせてしまうかと遠慮していたが、これからは困っている人がいたら、声をかけようと思った。
- ・段差がとても難しい。スロープの役割が重要だと気づいた。介助の人がいないと、とっても移動が怖い。声をかけてもらうのが重要だ。

安全対策や災害への備えについてのレポートは、住まいの中だけでなく、地域でよく利用する場所や、職場体験先にも調査対象を広げた。実際に工夫され

ている点が具体的に書かれているレポートが多かったし、多様な人びとが利用する地域に目を向けることもできた。



白杖体験動画のひとこま



安全対策レポート①



安全対策レポート②



### 3 おわりに

本稿で紹介した事例は、必ずしも「多様性」そのものを題材にしたものではない。多様な家族の暮らし方や、世界の食べ物・衣服・住まいに見られる多様な生活文化、ジェンダーなどについての事例ならば、読者の方々に伝わりやすかったかもしれない。しかし、悩みながらも、次のように考えることができた。

家庭科は、「多様性」にあふれている実際の生活を学習対象としている。それゆえに、どの内容を扱うにしても、「多様性」の理解と尊重に向き合うことになる。また、現行の教科書にあるように、わたしの興味・関心から学習に入ろうとすることは、一

人一人の考え方を大切にすること、言い換えれば「多様性」の尊重につながるのだといえる。こうしてみると、家庭科の学習は「多様性」の畑であると言ってもよく、その畑の作物が十分に生育するように「多様性」の理解と尊重ができるような授業を作っていきたいと思う。

#### <参考文献>

- ・ KGK ジャーナル 411 号「個人の発想を大切に、多様性を育む授業づくり」小林美礼
- ・ 文部科学省「2030年の社会と子供たちの未来」
- ・ ビズクロ「ダイバーシティ教育とは？子供の多様性を尊重する重要性和具体的な実践例」、<https://bizx.chatwork.com/diversity/education/>